

素材道具と関わる園庭遊びの生成と変容

—保育園5歳児クラスにおけるスノコ遊びの事例から—

佐藤嘉代子*

Innovation of Nursery School Play Ground using Material Tools

Nursery School Upper Class Children's Playing with Sunoko

Kayoko SATO

abstract

This study examines primary factors that influence the features of the environment at the common nursery school ground through analyses obtained by two types of data sets. One is about several examples of nursery school children's play, the other is about free answer style questionnaire written by nursery teachers. The examples were selected from fieldnotes of photos taken by a nursery teacher through qualitative analysis. From these data, three facts became clear. First, the opportunities for changing the nursery school ground features lay in children's play. Second, the material tools supported children's creative performances. Third, changing the nursery worker's motivation for risk led to the discovery of a new concept in children's play with material tools (Sunoko).

As a result, this paper clarified that the common environments of the nursery school ground changed into innovative one by children's power of play. Besides, this study showed evidence for modification of the features of environment in nursery school ground.

Key words: nursery school ground playing, features of the environment, sunoko, material tools, nursery worker's motivation

I 問題と目的

子どもにとって魅力的な園庭の遊び環境を創り出すにはどのような取り組みが可能なのであろうか。保育園の園庭は園児にとって安心安全な遊び場とされ、自由に遊べる環境でありながら、園庭の遊びが深まっていけない状況がある。

園庭の利用の仕方は園庭周辺に配置された固定遊具の周りや園庭の隅での虫探しといった使われ方が多く、固定遊具の代表であるブランコは危険への配慮のためはずされ、すべり台も階段部分に遮蔽物が置かれ自由に遊べない状況もめずらしくない。保育士による子どもの遊びに対する危険への配慮が時に子ども達の園庭での遊び環境を限定している状況があるのではないだろうか。

危険にはリスクとハザード¹⁾があるが、保育の現場ではそのような分析が十分なされないまま、最近ではとくに危険を回避することに重点が置かれ、嶋村(2012)が「自分だけが大丈夫とっていて、他の

キーワード: 園庭遊び、環境構成、スノコ、素材道具、保育者の意識

*お茶の水女子大学大学院博士課程

同僚がそうでない場合、『危なそうに見えることは、とりあえず止めておこう』というマイナスの悪循環に落ちていてしまいます」(p. 21)と述べられる状況が常態化しているようにも思われる。

そのような園庭の遊び環境では、汐見(2001)がいう「子どもたちのもっている攻撃性をベースとした、スリルとかスピードなどの心身の興奮そのものを楽しみたいという動機が作り出す遊び」(p. 129)は危険とされることが多いのではないだろうか。その結果、子どもが自分の能力より少し難しいことや少々リスクなことが含まれる遊びが園庭から姿を消しているように思われる。子どもが自由に遊び出すことができるような園庭環境はどのように構成し得るのだろうか。

園庭遊びの環境に関する先行研究には、おおよそ3つの傾向がみられる。第1は園庭環境を大規模な視点で捉える研究である。それは園庭の構築環境の再構成を行い遊びの拠点を作り出すことにより園庭遊びを活性化するという研究である(河邊 2006、木村 2009、村上 2010)。第2は園庭における道具や遊具と遊びの空間などの視点で環境を捉える研究である。横山(2003)は遊び内容と遊びの場の関係に着目し、遊びの誘発要因について「遊具・道具性」、「素材・素形」に注目している。また、安達他(2003)は園庭の中央部が5歳児の球技遊び以外にはほとんど利用されていないことについて、移動可能な遊具を庭の中央部に設置した結果、園庭の中央分での遊びが活発になったことを明らかにした。さらに溝口(2006)は園庭の「ものや場所(空間)」の改善によって遊びの場が形成されることを明らかにした。

第3の研究は園庭の遊具の工夫により園庭遊びの環境を改変しようとするもので、東間による園庭遊具に関する可動遊具の研究²⁾及び、石倉の園庭全体の環境の構成における自然財³⁾としての道具に関する研究がある。石倉(2012)は「幼児が直接使用する物的環境の有用性については、実際の遊びの姿から具体的に検討する必要がある。これまでの研究において、幼児が園庭の遊びの中で物や自然に関わる姿を丁寧に捉えているものはあるが、そのかわりを支えている道具について触れたものは少ない」(p. 19)と述べている。そこで本研究では園庭遊びの観察をとおして、子どもの遊びを支える道具について、物とどのように関わるのが子どもたちの創造性を刺激し、遊びを発展させることができるのか、そのダイナミズムを探ることを目的とする。

II 研究の基本的視点と方法

ほとんどの保育園の園庭には砂場をはじめ様々な自然財があり、加えて砂場遊具や三輪車等の車類、ボール、縄跳びといった多様な遊具類が用意されている。また多くの保育園の園庭には公園と同じような固定遊具が設置されている。そのような園庭の遊びにおいて、仙田(1984)の「遊具の構造」の視点があてはまるのではないだろうか。子どもたちが物との関わりにおいて、独自のイメージを見出す遊びの考察にさいして、本研究では仙田(1984)の「遊具の構造」の枠組に着目したい。

1. 研究の基本的視点

1) 遊具の構造

仙田(1984)によれば、遊具における子どものあそびには発展段階があるという。すなわち、第一の段階は「機能的あそび段階」で、遊具にそなわったあそびの機能を初歩的に体験する。この段階が繰り返されると第二の「技術的あそび段階」に移行する。この段階を超えると、その遊具を媒介としてゲームを始めたりする「社会的遊び段階」になるとことを明らかにした。また、「遊具のあそび行動は『休息的あそび行動』『めまいのあそび行動』『挑戦的あそび行動』『ごっこ的あそび行動』の4つに大きく分類された」(p. 29)という。このような「遊具の構造」の視点は、素材遊具と関わる遊びが展開される園庭遊びの可能性をより引き出す枠組みとして有効であると考えられる。

2) 素材道具としてのスノコ

本研究における素材道具とは福岡・上月(1983)が「遊具の目的をもって制作されたものではない、素

材遊具（ポンコツカー、鉄道の枕木、電信柱、古タイヤなど）も創造的遊びの為に有効な大型遊具となる」（p. 56）と述べているように、保育士が遊具として用意したものではないが、子ども達が遊具として扱う物を意味する。それらは素材的で可動性のあるもので園庭にあって子ども達が扱い動かせる自然財以外、また園庭の一般的な遊具（砂場道具、三輪車など車類、ボール等）以外の物、様々なサイズのゴザや人口芝、テーブルやイス、タイヤなどがあるが、本研究では特にスノコをとりあげる。

2. 研究の対象と研究方法

1) 園庭遊びの観察対象及び期間

研究対象園は筆者が勤務していた東京都E区旧M保育園⁴⁾。観察期間は2003年6月～2004年3月の9ヶ月間である。研究方法は第一に筆者が保育実践に関わりながら撮影した写真とそのエピソード記録を作成した。第二は2004年3月末にまとめた各クラス担任5名の一年間にわたる園庭遊びに関する自由記述によるアンケート⁵⁾の分析である。

写真撮影対象は5歳児が創り出す園庭遊びとスノコ等の道具と関わる他クラスの子どもの園庭遊びである。撮影場面は日々の子どもの園庭遊びの中で、スノコや他の素材道具の取り扱いにおいて新しい遊びの要素が現れた場面である。スノコや他の素材道具を用いて遊ぶ記録数87（撮影日数33日）のうち5歳児の道具に関わる遊びは30の記録（撮影日数20日）となり、そのうちスノコを用いる遊び19の記録（撮影日数14日）を抽出した。その際に『質的データ分析法』（佐藤2008）を参考にして園庭の遊びの定性コーディングを行い、スノコ他の素材道具の使用数や方法等のカテゴリを整理した。それに基づき事例コード・マトリクスを作成し、スノコ遊びの生成と変容の視点から5事例を抽出した。なお保育の写真撮影については、2004年1月の保護者会にて園長が保護者から了解を得た。

2) M保育園の園庭遊びにおけるスノコ導入の経緯

M保育園では2002年度に「環境を通した保育」の園内研修を重ね、その過程で「可動遊具」の視点を得、2003年度は園庭の遊び環境を見直すことになった。

2003年春、新年度の園庭環境整備のひとつとして、各クラスの前に敷いてあるスノコの一部、9枚のスノコ（長さ180cm、幅20cm）を子どもが持ち運べるように長さを半分のサイズにした。また、マリブルー（緑がかった濃い青色）一色のスノコをパステルカラーのピンク、黄緑、黄色、水色などに塗装した。

その結果、従来はテラスと園庭の地面との段差（13～14cm）を調整する為の生活用具で、ほとんど意識されていなかったスノコが子ども達に注目され、少しずつ遊びの中でままと道具のひとつとして使われ始め、所定の場所から移動するようになっていった。その後2～3ヶ月が過ぎた頃（6月）、スノコをただ敷くものとしてではなく遊具として利用する5歳児のスノコ遊びが観察された。

2003年6月頃はスノコの数は18枚であったが、8月に保育準備の一環として園庭の隅に放置されていた古いスノコを再利用しスノコの数を増やした。秋以降も数枚を補充した結果、2004年3月にはスノコの数は40枚となった。

III. 結果と考察

表1はスノコ遊びの特徴を捉え、「遊具の構造」の視点から子ども達がスノコ遊びに見出した意味を探るために、5歳児の19の記録をスノコ遊びの生成と変容の契機となる5事例のエピソードを中心に時系列的に示したものである。表1に示されるように、記録No.1はスノコ遊びの生成の様子であり、No.2は固定遊具とスノコを組み合わせる新しい試み、No.3はスノコと他の素材道具を組み合わせる子どもの遊び、No.5はスノコと他の素材道具の組み合わせの規模が大きくなり、基地的遊びの意図を明確にもった遊びでその後のスノコ遊びを決定付けた記録である。またNo.14は子ども達の技術が高まり、自分達でスリリングな

ゲームを作りだすきっかけとなった遊びの記録である。

表1 5歳児のスノコ遊び19記録

記録 No.	撮影日	スノコ 使用数	遊び場所	スノコ遊びの様子 【 】 は本文中に記載	遊具の発展段階			遊び行動			
					機能的	技術的	社会的	挑戦的	休息的	ごっこ 的	めまい 的
1	2003年 6月20日	10	砂場	【スノコ遊びの開始】	○	○		○			
2	7月28日	15	ジャングルジム	【スノコと固定遊具の組合せ】		○		○			
3	9月18日	4	乳児テラス前	【スノコと素材道具の組合せ】	○	○		○	○	○	
4	10月6日	12	砂場付近	<大規模なままごと> スノコを敷広げて広間が作られ、側にスノコの三角の立体構成がある。ひっくり返されたテーブルの脚の上にもう一台のテーブルが乗せられている。上のテーブルの4本脚と下のテーブルの脚4本の接触面が微妙にずれ、危ういバランスを保っている。側でじょうろで砂をすくって鍋にいれている男児2名、スノコに続くベンチの上でさらにもう一台のベンチをつなげ遊び場の拡張をしようとする男女各1名がいる。	○	○		○	○	○	
5	10月9日	13	乳児テラス前	【スノコ遊びの発展的展開】	○	○	○	○	○	○	
6	12月8日	11	太鼓橋	<太鼓橋の家作り> 太鼓橋の上に長いゴザをかけその上に乗せたスノコに座る男児3名。太鼓橋の縁に脱いだ上着類を洗濯物のように掛けている。太鼓橋の下にはタイヤ、テーブル、大型ボールが配置され、スノコが敷広げられている。その側にスノコの三角の立体構成がある。一輪車に山盛りの人口芝を積み運び込む男児1名。	○	○		○		○	○
7	2004年 1月5日	2	砂場付近	<タイヤの家づくり> タイヤを7つ重ねている。その高さは子ども達の身長と同じくらいである。その柱状のタイヤに裏返しにしたスノコを2本斜めに立て掛けている。タイヤの上は2枚の人口芝で蓋がされている。	○	○		○			
8	1月23日	11	太鼓橋	<宅配のお店みせやさんごっこ> (am. 9:39) 太鼓橋の上にスクーターが2台、籠が1個のっている。太鼓橋の下はベンチやテーブルが置かれ、スノコが敷広げられ、人口芝、長いシャベル9本、砂場道具が多数置かれている。太鼓橋に縄でバケツの滑車が作られている。そのスクーターに跨がる男児、至近距離で担任が見守っている。	○	○	○	○		○	○
9	1月23日	3	ジャングルジム	<ジャングルジムの家> ジャングルジムの2段目80cmほどの高さに巻物状のゴザ3枚とスノコ2枚を鉄柱(横)の上に置き座る男児1名、ジャングルジムの鉄柱に腰掛ける5歳男児1名、ジャングルジム3段から4段の間に5歳児1名、3歳児3名がいて巻物状のゴザをさらに2段上のジャングルジムの頂に持ち上げ、そのゴザを広げ屋根にする。側に5歳児担任が身をのりだして見守っている。	○	○		○	○	○	
10	1月23日	11	太鼓橋	<場の意味が変わる> (am. 10:54) 記録No.8の遊びの場で違うメンバーによる遊びになる。滑車がバケツではなく砂場道具類の収納籠になり、ロープの張り方を変えている。女児が2名それぞれに滑車の工合を確かめロープを引いている。その動き工合を太鼓橋の上から確かめる男児が1名、その場の様子をただながめる男児もいる。太鼓橋の下のベンチやテーブルをそのまま利用する。	○	○		○			
11	1月26日	1	太鼓橋	<自分たちの家> 太鼓橋の上にゴザを掛け、太鼓橋に鍋、バケツ2個を縄跳びで結んでぶら下げている。スクーターを一台、太鼓橋の2段目にかけている。ベンチ、スノコ、ゴザ、砂場の収納籠2つ(遊具入り)を配置する。	○	○		○	○	○	○
12	1月27日	7	太鼓橋	<自分たちの家> (am. 9:04) まずは家づくりから始める園庭遊び。太鼓橋にゴザの屋根をかけ、太鼓橋にスクーターを2台立て掛け、スノコ7枚、テーブル、ベンチ2台、調理用大型ボールなどを選び込む。その後集団で話し合い、次ぎの遊びに発展していく。	○					○	
13	1月27日	5	砂場付近	<やっと思えた素材道具> (am. 9:3) 気温7~8度の園庭。寒気のなかで遊べる5歳児だけの園庭である。記録No.12のメンバーが集団での童詩遊びに移ったので使われていないベンチ2台を砂場付近に移動させるている。5歳児クラスの中の辺縁的存在の子どもである。他にスノコ、タイヤ、ゴザを用意するが、寒さのためかゴザを布団替わりにしてゴザのなかに潜り込み寝る男児1名。そんな男児を囲み談笑する男児3名がいる。	○				○		
14	2月17日	9	乳児テラス前	【スノコで自分たちが創り出す遊び】	○	○	○	○	○	○	○
15	2月20日	15	砂場付近 から門前	<2階建ての家とお店屋さん> ベンチ2台、スノコ12枚を組み合わせ二階建ての家をつくる。1階の女児はかがんでいるが、2階部分の女児3人はスノコの上で寝転んでいる。この家の隣りでは男児7名が人口芝他の砂場道具を大量に集めてお店屋さんの準備中。人口芝は砂をはさんでジャムサンド、大量のシャベルは焼き鳥にみたててのごっこ遊びが併行する。	○					○	○
16	3月17日	1	鉄棒	<シーソーブランコ> 鉄棒に縄飛びでブランコを作り、その縄にスノコを置いたもの。スノコの両端に二人の子どもが立ち、鉄棒につかまりシーソーのように上下しながら、前後に揺れるブランコ。		○	○	○			○
17	3月17日	1	太鼓橋	<太鼓橋ブランコ> 太鼓橋から縄飛びのロープを4本垂らしそこにスノコを横に結んだブランコ。太鼓橋の鉄柱に自分たちでぶらさがりながら揺れを楽しむ。		○	○	○			○
18	3月19日	2	ブランコ(支柱)	<2段ブランコ> ブランコの支柱から下げられた太い縄2本にスノコを横にし、縄飛びで結んだもの。縄の中程にもう一枚のスノコを横にして結び付け、スノコが2段になっている。遊びの途中から上のスノコの用途が変化し、立って漕ぐ際の背もたれになっていた。		○	○	○			○
19	3月19日	9	ジャングルジム	<ジャングルジムのすべり台> ジャングルジムの内部にすべり台が作られている。ジャングルジムの4段目の鉄柱(横)にスノコの凸部をひっかけ、そこから3枚の斜めにスノコを斜めにつないだものである。その他の種類のすべり台も併設されている。3段目の鉄柱(横)にスノコの半分をジャングルジムの外に出すようにして置く。そのスノコに子どもが乗るとシーソーのように斜めになりジャングルジムの外にすべり降りることができる。パタンと斜めになってもスノコの上端がジャングルジムの鉄柱(横)にぶつかり、安全な斜面ができる。その際、腕の力を加減しながら、鉄柱に懸垂するようにつかまり降りる遊びである。		○	○	○			○

1. スノコが誘発する遊びの生成と変容

1) スノコ遊びの開始 (2003年6月) <記録 No. 1>

年長児 4 名が園庭の隅、砂場の奥の穴蔵的な狭い空間にスノコを立て掛け、7 枚のスノコを積木のように組み合わせ立体空間を構成していた。不揃いなスノコの微妙な長短を考慮し、スノコの凸の部分を利用し安定性のある立体の四角形を作り出し、スノコの微妙なバランスを確かめていた。

【考察】 スノコを大型積み木のように扱っていた。スノコが従来の園庭遊具にはない立体的構造物の造形素材、建築資材のように扱われている。非常すべり台の縁と園庭のフェンスの間の空間を利用しスノコを固定させ安定感のある合理的な四角の立体空間を構成していた。



写真1 スノコ遊びの開始

2) スノコと固定遊具の組合せ (7月) <記録 No. 2>

スノコのわずかな凸部を利用し、長短不揃いの 15 枚のスノコをジャングルジムの四面すべてに縦に掛けている。園庭の隅、ジャングルジムの園庭空間を3枚のスノコを横にして使い遊び空間を仕切っている。スノコは凸部があるのでスノコを横にして立てた状態で置いている。

【考察】 ジャングルジムにスノコを縦に立て掛ける新しいスノコの使用パターンが見られる。スノコをジャングルジムの丸い鉄柱に巧みに掛けるバランス感覚が求められる遊びである。5 歳児の遊びの集中力と持続力がうかがえる遊びであり、ジャングルジムが家でスノコが建物の壁のようになっている。また、地面にスノコを横にして立たせるように置き、自分達だけの遊び空間を作りだしている。日常的には、ジャングルジムの遊びにおいては物を持って登ることは危険とされている。そのジャングルジムにスノコを組み合わせるといふ発想が斬新である。



写真2 スノコと固定遊具の組合せ

3) スノコと素材道具の組合せ (9月) <記録 No. 3>

ベンチ、テーブル、イス、スノコなどの道具が組み合わせられている。3台のテーブルの使用法は床として、横に立て掛け遊び場所の外壁として、ひっくり返し器として等それぞれ意味が異なる。スノコの使用パターンは、斜め水平、水平に敷くという2通りである。スノコの凸部を利用し、斜め水平(スノコを滑り台替わりにする)にしている。ベンチは座るものであり同時にそこに斜めに立て掛けられたスノコの滑り台の一部となっている。いろいろな道具が建築資材のように組み合わせられている。



写真3 スノコと素材道具の組合せ

【考察】 子どもたちはそれぞれに道具に意味を見出しながら、場を共有している。テーブルは園庭でもままごと遊びの食卓のイメージがあり、従来はテーブルの上に乗ることは見られなかったが、この事例以降、園庭ではテーブルが多様な使われ方をするようになる。表1によれば、スノコと素材道具を用いた遊びの8例の記録(No.4, 6, 8, 10, 12及び事例として詳述したNo.3, 5, 14)においてテーブルが15台使用されている。その使い方はテーブルの使用数に対して、逆さ、横に立てる、テーブルに乗る等の技術的利用が13台(87%)であり通常の機能的な使い方は2台(13%)となっている。

4) スノコ遊びの発展的展開(10月) <記録No.5>

スノコの使用方法に二つのパターン(並列に敷く、直列・並列の組み合わせ)が見られる。テーブルは逆さ、横に立てる用い方である。スノコの奥の男児はベンチを逆さまにし、大きな遊具の収納籠を積み、その上にタイヤを乗せ、そのタイヤの輪の中に入り込んでいる。また、直列・並列の組み合わせで敷き詰められたスノコの上では、基地を作り終わって自分の遊びに集中する男児がいる。計6種類の素材道具とスノコ13枚が組み合わせられ基地が作られている。



写真4 スノコ遊びの発展的展開

【考察】 スノコ遊びが乳児テラス前で展開されている。砂場の周りで用いられることが多かったスノコが園庭の中央部分に進出し始めた。このころから基地作りが日常的になり、道具を用いた遊びが一段と活発になる。道具を量的に使うことで園庭での自分たちの遊び場を作り、午前中いっぱいそこを拠点として遊ぶようになる。靴を脱ぎそろえて快適さを演出し、それぞれが自分の遊びを追求している。この頃からスノコ等、素材道具の移動範囲が広がり、スノコ等の素材道具と関わる遊びが園庭のあちこちに同時に点在するようになる。

5) スノコで自分たちが創り出す遊び(2004年2月) <記録No.14>

スノコの6つの使用パターンが見られた。スノコの凸部を利用し立体的空間を作る、スノコを垂直に使用する、スノコの間から別のスノコをT字状に伸ばし空間で水平に使用する、並列に敷く、斜面を構成する、スノコを直列・並列の組み合わせで敷く等である。テーブルやベンチ、タイヤなどと組み合わせ広い遊び空間を作りアスレチックの遊びを創りだし遊ぶ。



写真5 スノコで自分達が創り出す遊び

【考察】 それぞれの素材道具の特性を知り、その扱いの技術的な発展に支えられる遊びであり、子どもにとってかなりの身体能力が求められる遊びである。それぞれのスノコの凸部を確実に組合せ、その上にタイヤを乗せても揺らがない堅固な作りになっている。スノコの揺れを体感しながら進む身体バランスが求められる遊びである。タイヤの重量を想定しスノコを組み合わせる等、6月に「スノコ遊び」が出現して以来9ヶ月間で最もスリリングで遊びの智慧が集約された遊びである。この事例は5歳児の園庭遊びの抽出19の記録の中でスノコの使用パターン(表3)の要素が一番多い。

2. スノコ遊びの特徴

以上5事例のスノコ遊びの変容過程の分析をしたが、スノコ遊び全体、19の記録をとおしてスノコ遊びの特徴をまとめてみたい。スノコ遊びが生成された要因はスノコの素材がもつ特性が大きいといえよう。その特性とは一般的なプラスチック製の砂場道具にはない、子どもが持てる程よい重さ、大きさ、硬さ、木材の質感である。またスノコがもつ凸部の機能性に大きな意味があることが示唆された。凸部があることで立体構成素材として優れた道具になるだけでなく、身体全体を用いての造形活動⁶⁾の素材としての特性もあるとも考えられる。このような5歳児のスノコ遊びには以下の4つの傾向がある。

1) スノコ遊びの記録数・園児数の増加

スノコ遊びの記録数及び児童数の変化は表2に示されるように、6月にスノコ遊びが生成されて以来持続的に遊び継がれ、1月に記録数が際立って多くなる。スノコ遊びの増加の要因として以下の2点が考えられる。第一は素材道具の種類と量的な増加である。保育士が子ども達の遊びを観ながらスノコやままごとテーブルの補充や新しい素材を用意するなど、漸次整備していった。ゴザは従来大きなサイズのまま使われていたが、子どもたちが扱いやすいようにゴザの長さを短くするなど試行錯誤した結果、サイズの多様性ととも数量も増加した。第二の要因は素材道具を扱う技術の発展がある。単にスノコの扱いが巧みになるだけでなく他の素材道具それぞれの特性を知ることで素材道具の組み合わせが多様になり、遊びが高度でより複雑になっていった。特にスノコを縄跳びの縄で結んだりほどこいたりの技術が高まり、表1に示されるような鉄棒でのシーソーブランコ(記録No.16)、太鼓橋でのスノコブランコ(記録No.17)ブランコの支柱を利用した2段ブランコ(記録No.18)など、躍動感ある遊びを創り出していた。このように遊びが複雑さとダイナミックさを増すと共にスノコ遊びの記録数・児童数がともに増加した。またスノコを用いる遊びが集団的遊びを誘発することがうかがえた。

表2 スノコ遊び参加園児数と記録数の変化

月	記録数	人数
6月	1	6
7月	1	2
8月		
9月	1	8
10月	2	11
11月		
12月	1	5
1月	7	37
2月	2	19
3月	4	16
計	19	104

2) スノコの特性と使用パターンの多様性

スノコの利用では並列に敷くパターンの他に様々な使い方がされている。表3に見られるようにスノコの使用には14のパターンがあり、スノコの凸部を利用することで遊びに立体的要素が加わり、遊び空間に変化をもたらしていることがうかがえる。スノコ遊び19の記録においてそれらのパターンを組み合わせ37回の使用が見られた。凸部がスノコの大きな特性であり、その特性が単なる板では作れない構成遊びを可能にしている。凸部があることでただ敷くことで、地面より一段高い遊び空間をつくりだすことができる。さらにスノコに潜む意味がテーブルやベンチ等と組み合わせられることにより、一段と遊び方の多様性が増し創造的でダイナミックに遊びが展開されるようになっていた。

表3 スノコの技術的使用パターン

No.	スノコの使い方	記録数
1	立体・四角の構成をする	2
2	立体・垂直に立て掛ける	2
3	立体・横にして立て掛ける	3
4	立体・三角の構成をする	2
5	立体・斜め横置きにする	1
6	空中で交差する	1
7	2階建てにする	1
8	屋根をつくる	1
9	水平にし棚を作る	1
10	水平・斜面を構成する	3
11	水平・斜面裏(凸部を上にする)	1
12	固定遊具と組合せる	7
13	並列に敷く	10
14	直列・並列の組み合わせ	2
	計	37

3) スノコと他の素材道具との組合せ

ほとんどのスノコ遊びでは数種類の素材道具が組み合わされている。最も多い遊びでは7種類の素材道具が組み合わされており、19の記録中16%となる。同様に4~6種類の組み合わせは42%、2~3種類の組み合わせは26%、スノコ1種類だけの遊びは16%となる。スノコの他にテーブルやベンチ、イス、タイヤ、ゴザ他の素材道具を用いた空間構成の遊びに、砂場遊具や園庭遊具類を加えることでままとやごっこ的な要素が加わり、遊びに膨らみをもたらすことがうかがえた。

しかし、スノコ1種類だけの遊びも注目すべき遊びが創り出されていた。表1の記録No. 19の<ジャングルジムのすべり台>は単にジャングルジムにスノコを組合せるだけの遊びであるが、スノコを扱う技術の高まりにより、スリリングで躍動的な遊びを創出していた。このように、スノコ遊びは素材道具の種類の多少では一概に捉えられない遊びのおもしろさがある。

4) スノコ遊びの構造的特性

5歳児のスノコ遊び19の記録(表1)を仙田の遊具の構造の視点から分析すると、遊びには複数の要素が重なっており、その要素の総計は45となる。図1に示されるように遊び行動の要素数45に対し、挑戦的遊びの要素が含まれるものが16例(36%)、ごっこ的遊び要素が見られるものが11例(24%)、同様にめま이의遊びが9例(20%)、休息的遊びが9例(20%)となる。子どもたちがスノコを用いて創り出す遊びにおいて、仙田の「遊具の構造にみられる4つの系統があることが示唆された。遊びの行動で一番多い要素が挑戦的遊び行動であることから、スノコ遊びにはスリリングな遊びを求める子どもたちの意志が表れていたといえよう。同様に表1に見られる仙田の遊具の構造における遊びの発展段階についても要素の総計は38となる。そのうち機能的遊びが14例(37%)、技術的遊びが17例(45%)、社会的遊びが7例(18%)であった。スノコの扱いにおいて「機能的遊び段階」と「技術的遊び段階」が多く「社会的遊びの段階」は表1に示されるようにNo. 14の「スノコのスリリングな遊びの構築」以降の遊びに多く見られるようになる。スノコの基礎的な扱いの技術が伴うことにより社会的な遊びになるという遊びの発展の様子が示唆された。

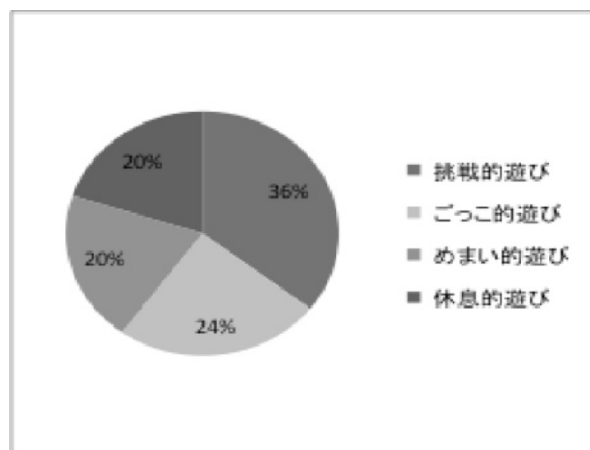


図1 スノコ遊びの構造

3. 園庭遊びを見守る保育者の意識変化

このような構造をもつスノコ遊びはその発展に伴い、子どもたちが少々リスクに挑戦しようとする姿が見られるようになった。スノコを用いて創り出すスリリングな遊びは保育者のまなざしに支えられての遊びであったと思われる。以下において、園庭遊びを見守る保育者の意識の変化について、5歳児担任二人の記述を中心に考察する。アンケートでは1年間を5期に分けているが、9ヶ月間のスノコ遊びを便宜的に以下の3つの時期を中心に考える。

6月から8月は、危険に関するものと、素材遊具と固定遊具の組み合わせの遊び方についての記述がある。危険について担任Aは「春の頃は子どもたちの遊びを危ないとばかり観ていたが少しずつおもしろいと思える視点が自分の中にでてきた」、「危険を感じることは忘れていないがどんどん発展する子ども達の遊びにいつのまにか入り込んでいた」と記している。また担任Bは「太鼓橋の遊びは危険でもあるので怪我のないように側で見守る」、「子ども達の遊びはおもしろくて保育の予定を変更して遊びを見守ることも

あった」と述べている。

9月から12月では、スノコ遊びが発展し、ダイナミックな展開がみられた。担任Bは「約1時間、子ども達が公園つくりで夢中になり、いろいろ考える力に感心する」と述べ、担任Aは「ごっこ遊びのイメージの深まりと素材をみてる子どもたちの遊びに「本当におもしろい発想に大笑いだった」と子ども達の遊びに引き込まれたと記している。このように、リスクに対する意識より素材道具の使い方に対する遊びのおもしろさに関する記述がなされている。

1月から3月は再び危険に対する明確な意識が記される。表1の記録No.19について担任Bは「ジャングルジムでのすべり台は、ジェットコースターという子もいた。自分でバランスをとりながらすべり降りてくる遊びでスノコとジャングルジムの間に指を挟むのではないかと心配したが大丈夫だった。大人がやってもけっこうスリルがありおもしろかった」と記している。子ども達の道具の用い方や発想のダイナミックさに伴い、大人には目的外使用と思える使用方法をどのように受け止め、子どもたちの遊びをどう理解するかが問われながらも、遊びを支えようとする具体的な配慮の記述がなされている。

このような保育者の感想から、保育者は子どもと一緒に遊びながらリスクを具体的に確認していることがわかる。9ヶ月間の遊びの経緯をふまえ、保育者の意識がスノコ遊びのもつ危険に対する単なる怖さではなく、子どものスノコ遊びを具体的に支えるための意識へと変化したことが明らかになった。さらに担任Aは「スノコやテーブルなど子どもたちが遊ぶ素材がたくさんあるが、色々な遊び方をするので消耗も早いと思う。こまめに釘の状態や木の工合などに目を向ける必要がある」と素材装具の整備に対する配慮を記すようになる。

スノコ遊びの発展の過程で、保育者は子どもの遊びを受容することに徹しスノコの扱いを大人がリードする事は皆無であった。保育者が子どもとの生活の場で何を「おもしろい」と思いその遊びの何を支えようとするのかによって環境整備の意図が変わってくる。その際の保育者の役割は「子どもが集中して遊ぶ姿」を物心ともに支えることであり、その為のヒントは子どもの遊びの中にあると思われる。以上のように保育者の意識がリスク中心の危機意識から子どもの創造的な遊びの意味を深く受け止めようとする前向きな意識へと変化したということができよう。

IV おわりに

本研究では5歳児クラスの子供たちが自ら遊びだし、生活道具(スノコ)を遊具化しその道具に関わりながら、子ども自身が創造性を発揮し遊びを発展させている姿を捉えることができた。それは中田(2013)が「同じ物を同じ仕方で使っても、使い方がほんのわずかにでもスムーズになればやはり新たな認識が身に着き、それまでの活動がより洗練されたことになる」(p.89)という遊びのダイナミズムを受け止めた姿といえよう。また、このように子ども達が独自のイメージを積み重ね自らを刺激し、道具と関わる遊びを通して、東間(2003)が「固定遊具と砂場だけという貧しい遊びの環境」(p.785)と評するような、変哲のない保育園の園庭遊びの環境を、子ども達自身が魅力的な園庭環境に変化させたことが示された。その過程で園庭遊びの環境構成を変革する要因として以下の三つが明らかになった。

第一の要因は園庭の遊び環境を変える契機は子ども達が素材道具に独自の意味を見出す遊びの中にある。第二の要因は保育者の適切な素材道具の準備が子ども達の遊びを支えたことである。第三の要因は保育者の素材道具とスノコ遊びに対するリスクとハザードに対する意識変化である。当初危惧されたスノコの扱いに対する危険への意識が薄らぐことで「子どもの遊び」の意味を探究しあう保育者どうしの関係性が育まれていった。そのような保育士のリスクに対する意識変化は日々遊びの情報交換を徹底したことによって培われ、同時にその過程で子ども達が生き生きと遊びを発展させることになっていった。

そのような躍動的な遊びが観られる園庭では汐見(2012)が「子どもの自発的な遊びこそが、子ども達

の運動能力や身体をもっとよく育てる」、「自己選択、自己超越、安心、没頭こそが大事」⁷⁾と述べるような、子ども達が自由に遊べる保育環境が培われていったといえる。また、そのような保育環境においては仙田(2002)が「子どもが空間を変える。子ども達が自分でその環境を形成する力を養いたい。潜在的に子ども達はそのような能力を持っているのである。」「空間をつくる事によって想像力と創造力を鍛える。与えられるのではなく、自分たちでつくるのだという事を体験させる。体験する事が必要。そうする事によって子ども達はそのような能力をさらに伸ばしていくことができる」(p. S48)と述べるような能力を育む遊びが生まれていった。すなわち、自分の遊びのイメージや意志を具現化し行動する自立的能力が誘発される遊びである。

本研究では5歳児のスノコ遊びに焦点を当てた。しかし、スノコは園庭遊びの素材の一部であり、スノコ以外の素材道具を用いた遊びや他にも様々な遊びが展開されていた。今後の課題として園庭遊びを深める契機の探求を継続し、そのひとつとして、5歳児のスノコ遊びを模倣する各年齢の遊びを捉え、異年齢の視点から素材道具に関わる遊びのおもしろさの伝搬のメカニズムを探りたいと考えている。

注

- 1) 吉田(2006)によればリスクとは「園児の心身の成長や発展にとって必要な危険であり、園児の遊びの場で許容される危険」であり、ハザードとは「園児が自分自身で予知や判断できるものではなく、園児の成長・発達に全く関係のない危険(p. 115)であるという。
- 2) 「可動遊具」とは東間(1994)が園庭の遊具を模索する中で「素材性を持つ園庭遊具」として自身が考案したウッドブロックの仮称として提唱した概念である。東間(1997)は「可動遊具」について「①いろいろな見立てが可能なもので、素材的なもの。②創造性を育てられるもの(数量、立体、平面)、③持ち運びしやすいもの(大きさ、重さ、形)、④子ども同士関わりのもちやすいもの(数量、種類)(p. 922)であるとしている。
- 3) 石倉(2012)は自然材を「園庭において、風や太陽の光を含め、水、砂や土、草木や木、石、雪や氷という自然の材」(p. 19)であると定義する。
- 4) 2011年4月に民間委託され、私立保育園となる。
- 5) 園庭遊びに関するアンケートは各年齢の担任に以下の項目について自由記載の形式で行なった。アンケート内容は二種類である。第一は園庭遊びの変化について3つの観点から記載を求めた。すなわち、①スノコ遊びに気付いたきっかけ、②担当クラスの子どものみられたスノコの遊びかた、③他クラスの遊びの様子についてである。第二は担当クラスの子どもの1年間の園庭遊びについて尋ねるものである。1年を5期(4月～8月、9月～10月、11月～12月、1月～2月、3月)に分け、それぞれの時期の遊びを3つの観点から記述を求めた。それらは①次期ごとの子どもたちの遊びの様子、②遊びのなかでの子どもの関心の対象について、③遊びを支える保育的配慮である。
- 6) 達脇(2011)は「造形活動を遊ぶというのは、まさに新しい世界との出会いであり、それは新たに実存を編み上げて行くことになる」のであり「自分を取り囲むあらゆる物との同調関係を築く」感性を豊かにする行為である(p. 104)という。
- 7) 汐見稔幸(2012)「これからの保育・幼児教育のために」お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム現代育児論講演記録、1-8頁。

引用文献

- 安達勉・奥村幸子・益田薫子・油谷理恵・吉原麻奈加・宮城紀子・大勝愛・大蔵幸子・渡邊みゆき・榊原絵里子・貝瀬裕子・坂本絵(2003)「園庭中央分の環境設定の在り方について—幼児の戸外遊びの充実を目指して—」『文教学院大学研究紀要』15(1) 63-84頁。
- 福岡貞子・上月素子(1983)「保育所における大型遊具の遊びの研究—三歳未満児のための室内大型遊具—」『幼児の

教育』82(3)、55-63頁。

石倉卓子(2012)「幼児の育ちに必要な園庭環境の検討ー表現行為を可能にする自然素材と道具の関係性ー」『保育学研究』50(3)、18-28頁。

河邊貴子(2006)「園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開ーウッドデッキの新設をめぐるー」『保育学研究』44(2)、235-245頁。

木村歩美(2009)「すべての園児と一緒に遊ぶことのできる園庭環境の創造ーデッドスペースを遊びの拠点に変える試みをきっかけにー」『和泉短期大学研究紀要』30、51-60頁。

溝口綾子(2006)「幼児の遊びを促す環境の役割ー園庭の改善と遊びの変化ー」『教材学研究』17、49-56頁。

村上八千代(2010)「遊びの『しかけ』を考えるー園庭改造の過程のなかでー」『発達』31(122)、35-41頁。

中田基昭(2013)『子どもから学ぶ教育学ー乳幼児の豊かな感受性をめぐってー』東京大学出版会

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』新曜社

仙田満(1984)「遊具の構造」『建築雑誌』99、29-31頁。

仙田満(2002)「空間とこどもの相互関係」汐見稔幸・塩野谷齊・刑部育子・仙田満・佐々木正人・中瀬泰子・田中泰行「環境=再構成への実践的アプローチー環境づくりへの構想力と現場実践構成ー」『日本保育学会大会論文集』55、S48-S49頁。

嶋村仁志(2012)「危険とつきあう力をつける」『幼児の教育』111(3)、21-23頁。

汐見稔幸(2001)「汐見稔幸が語る「遊び論」子どもの遊びってなんだろう<遊びと保育>の原理論の試み」汐見稔幸・加用文雄・加藤繁美『これがボクらの新・子どもの遊び論だ』童心社、109-143頁。

汐見稔幸・村上博文・松永静子・保坂佳一・志村洋子(2012)「乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容」『保育学研究』50(3)、64-74頁。

達脇知弘(2011)「遊びの構造を分析することで見えてくる造形教育の在り方」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』14、93-105頁。

東間掬子(1994)「園庭遊具を考える(その7)ー考案遊具の導入と遊びの観察ー」『日本保育学会大会研究論文集』47、672-673頁。

東間掬子(1997)「園庭遊具を考える(その10)ー可動遊具の導入と遊びの発展についてー」『日本保育学会大会研究論文集』50、922-923頁。

東間掬子(2003)「園庭遊具を考える(その15)ー園庭環境に関する保育士の意識ー」『日本保育学会大会論文集』56、784-785頁。

横山勉(2003)「園庭における幼児の遊び空間に関する研究ー園庭の遊びの誘発要因分布ー」『日本建築学会北陸支部研究報告集』46、303-306頁。

吉田麻耶・總見陽介・赤木徹也(2006)「園庭における園児の学びに関する考察ー学びと環境の関係性に基づく保育環境の質的改善に関する研究その2」『日本建築学会大会学術梗概集(関東)』115頁。